

■（１６４）疲労感漂う仮設住宅、避難生活は４年目へ

仮設住宅の集会所で４人がお茶を飲んでいた。７０～８０代の女性と６０代の男性。昼間に常駐していた支援員が４月から週１回の巡回に減ったことへの不安が、話題の中心だった。長い仮設生活で、精神的に参った人や足が悪くて部屋にこもる人も出ているという。

家を失った被災者が仮設住宅に移り始めてからまもなく丸３年になる。震災発生から短くても１カ月半続いた避難所生活から思えば、少なくとも家族だけの空間を確保できる仮設住宅を、被災者も喜んだ。３年前のスクラップ帳をめくると、４月半ばから「入居始まる」の記事が載り始めていた。山に近い高台に建てたためクマが出没するのではないかと。冬になると寒風が直接部屋に入り込むのを防ぐため扉の外側を覆う風よけをつけるべきだ——過去の震災の教訓から様々な提言が相次いだ。そんな中、現場の取材記者がもっとも懸念したのは、「原則２年の入居期間で避難は終わるのか」だった。その心配は現実になった。

阪神大震災で全仮設が閉鎖されたのは発生からほぼ５年。東日本大震災はそれを超えるのは確実だ。行政ではすでに、２０１６年の「仮設から仮設への転居」が言われている。（山）